

# 中尾根頭遺跡

平成10年度 県営担い手育成基盤整備事業  
松沢地区に先立つ緊急発掘調査報告書

1999. 3

長野県原村教育委員会

なか お ね かしら い せき

# 中尾根頭遺跡

平成10年度 県営担い手育成基盤整備事業  
払沢地区に先立つ緊急発掘調査報告書

1999. 3

長野県原村教育委員会

表紙地図10,000分の1 ○印が中尾根頭達跡

## 序

八ヶ岳山麓に位置する原村では、村の基幹産業である農業の合理化と生産性向上が求められており、これにともなう県営圃場整備事業が大規模に進められております。また、当地を含めた八ヶ岳西南麓は遺跡の宝庫・縄文のふるさととして全国的にも著名であり、古くから注目を集めて来ました。

今回報告する中尾根頭遺跡は「平成10年度県営担い手育成基盤整備事業払沢地区」内に存在しており、諏訪地方事務所の委託と国・県からの補助金の交付を受けて原村教育委員会が緊急発掘調査を実施したものであります。

今回の調査にあたり、諏訪地方事務所土地改良課各位、払沢区及び同地区実行委員会各位、地元地権者の方々のご理解・ご協力、長野県教育委員会のご指導、長野県埋蔵文化財センターをはじめ発掘にかかわる多くの皆様のご協力に深甚なる謝意を表する次第であります。

発掘現場では、長野県埋蔵文化財センター 調査研究員田中正治郎氏の多大のご助力、そして炎天下でご苦労された作業員の皆様により、失われていく貴重な資料を記録に残すことができました。また、発掘調査報告書刊行にいたる過程において、お世話いただいた関係各位にたいし厚くお礼申しあげ、序といったします。

平成11年3月

原村教育委員会  
教育長 大館 宏

## 例　　言

- 1 本報告は「平成10年度県営担い手育成基盤整備事業払沢地区」に先立って実施した、長野県諏訪郡原村払沢に所在する中尾根頭遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、諏訪地方事務所の委託と、国庫および県費から発掘調査費補助金交付をうけた原村教育委員会が、平成10年9月3日から11月18日にかけて実施した。整理作業は、12月8日から平成11年3月24日まで行なった。
- 3 現場における記録と写真撮影は平出一治、遺構の実測は津金喜美子・進藤郁代が行った。
- 4 測量基準点設置は株式会社写真測図研究所に、石器の実測およびトレース作業は株式会社アルカに、炭化種子の同定はパリノ・サーヴェイ株式会社に、それぞれ委託した。
- 5 執筆は、平出一治が行なった。
- 6 本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保管している。  
なお、本調査関係の資料には、99の原村遺跡番号を表記した。

発掘調査から報告書作成にわたって、原明芳・武藤雄六の諸氏に御指導・御助言をいただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

## 目　　次

例言・目次	
I 発掘調査に至る経過	1
II 発掘調査の経過	1
III 遺跡の位置と環境	2
IV 調査方法と土層	2
V 遺構と遺物	5
VI 中尾根頭遺跡出土種子の同定報告	14
VII まとめ	16
引用参考文献	
発掘調査団名簿	
報告書抄録	

## I 発掘調査に至る経過

平成5年度から実施されてきた「県営担い手育成基盤整備事業払沢地区」も6年目をむかえるが、中尾根頭遺跡の保護については、平成9年8月22日、10月13日の両日に行なわれた「平成10年度県営担い手育成基盤整備事業払沢地区にかかる埋蔵文化財保護協議」で協議された。

遺跡は現状のまま保存していくのが最も望ましいことであるが、原村の農業の将来を考えると農地の整備は必要なことである上に、農業者から強い要望もあり「記録保存やむなき」との考えに落ち着き。平成10年度に緊急発掘調査を実施し、記録保存をはかる方向で同意をみることができた。出席者は長野県教育委員会文化財保護課、諏訪地方事務所土地改良課、原村役場農林課、原村教育委員会の4者である。

その後も協議を重ね調査日程等の確認を行い、原村教育委員会は、諏訪地方事務所から緊急発掘調査の委託を、また、国庫および県費から発掘調査補助金交付をうけ、平成10年9月3日から11月18日にわたって緊急発掘調査を実施した。

## II 発掘調査の経過

平成10年9月3日 発掘準備をはじめる。

4日 調査地点の草刈りをはじめる。

9日 草の片付けを行い、基準杭の設定をはじめる。

10日 重機によるトレーナー掘りとトレーナー内の精査をはじめる。

11日 繩文時代中期の土器破片と石器、平安時代後期の土師器と灰釉陶器の破片が出土する。

14日 住居址の落ち込みを確認し便宜的に1号住居址と呼ぶことにする。重機による表土剥ぎをはじめる。

17日 雨量が多く、地下水が高いことも手伝い現場に入れない状況が続き一時作業を中断する。

10月22日 今日から住居址の検出作業をはじめる。

23日 引き続き住居址の検出作業を行い、2号住居址の埋没を確認する。

28日 2号住居址の検出写真を撮影し精査をはじめる。



第1図 原村域の地形断面模式図（宮川—中尾根頭—赤岳ライン）

- 29日 1号住居址の検出写真を撮影し精査をはじめる。
- 11月4日 1号住居址の全景写真を撮影し、竪の精査と実測作業をはじめる。
- 9日 2号住居址の全景写真を撮影し、竪・ピットの精査と実測作業をはじめる。
- 16日 1号住居址（黒色土中）下層の調査をはじめる。縄文時代中期の土器破片と石器が出土する。
- 18日 縄文時代中期の土器破片は僅かに出土するが、遺構の埋没は確認できないことから居住区域は尾根上と考え、片付けを行い調査を終了する。

### III 遺跡の位置と環境

中尾根頭遺跡（原村遺跡番号99）は、長野県諏訪郡原村6466番地付近に位置する。原村役場の東南方400mにあり、地理的条件に恵まれていることから付近では宅地化が進んできている。

このあたりは八ヶ岳西麓のほぼ中央に位置し、東西に細長く発達した大小様々な尾根がみられる。それらの尾根上には第2図および表1に示したように、縄文時代を中心とした数多い遺跡が埋蔵されている。その一つである本遺跡は、八ヶ岳から流下する大早川と阿久川という2本の小河川によって北と南を浸蝕された東西に細長い尾根上から南斜面に立地している。調査の対象は工事の関係で尾根の南斜面だけであり、地目は普通畑と水田で、畑地の地味は良いが水田は疊が多く地下水は高いようである。標高は1020m前後を測るが、原村における遺跡高度限界は標高1200m前後のラインである。

本遺跡から土器や石器の発見は聞いていたが、遺跡が立地する尾根はやせているうえに、墓地として利用されている範囲は広く、すでに破壊されているとの思い込みもあり注意することはなかった。たまたま、県営担い手育成基盤整備事業払沢地区にかかることが明らかになり、南斜面の普通畑で踏査を試み平安時代の土師器破片を採集し遺跡であることが明らかになった。

調査の対象となる範囲は狭いうえに耕作による搅乱も著しく、すでに水田造成による破壊もみられ保存状態は良くなかった。

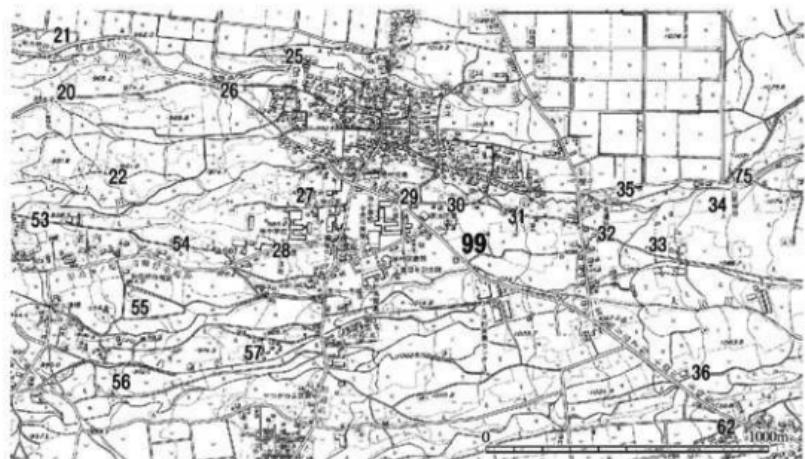
### IV 調査方法と土層

発掘調査の対象は第3図に示したように、平成10年度県営担い手育成基盤整備事業払沢地区にかかる遺跡の全域におよんでいる。

住居址が出土した地点は普通畑であるが、「遺跡の位置と環境」でも述べたように耕作の歴史による搅乱が著しく、中にはロームを粉碎し耕作土としている所もみられた。

調査では遺跡の範囲が不明確であることから、はじめに範囲を把握するためのトレンチ掘りを重機で行い、引き続きトレンチ内の精査を人力で進めた。その結果、黒色土中に構築された住居址の落ち込みを確認し、遺物の散布範囲がほぼ明らかになる。この時点で表土剥ぎを重機で行い、引き続き人力で遺構の検出作業を進めたが、国家座標に軸を合わせた $2 \times 2$ mのグリッドを設定して行っている。

発掘調査は、原則としてローム層の上面ないしは地山の疊面まで行い。遺物の取り上げは、トレンチ調査はトレンチ別、遺構の検出作業ではグリッド別、遺構に伴うものは遺構別に行った。



第2図 前尾根遺跡の位置と周辺遺跡 (1 : 20,000)

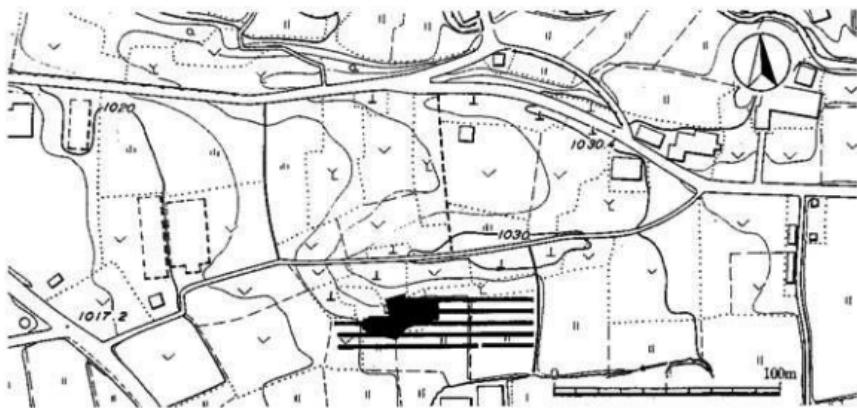
表1 中尾根頭遺跡と付近の遺跡一覧

○は遺物発見 ○は住居址発見

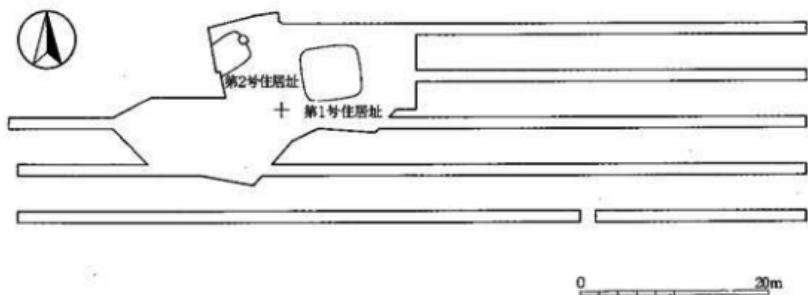
番号	遺跡名	旧石器	縄文					弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
			草	早	前	中	後							
20	前尾根			○	○	○				○	○	○	○	昭和44・52・53・59・平成9年度発掘調査
21	上居沢尾根				○	○	○			○	○	○	○	平成4年度発掘調査
22	清水		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	平成8年度発掘調査
25	裏尾根		○		○				○	○	○	○	○	平成8・10年度発掘調査
26	家下				○				○	○	○	○	○	昭和59・平成9年度発掘調査
27	開瀬沢				○				○	○	○	○	○	昭和62・平成9年度発掘調査
28	宮平								○	○	○	○	○	村史跡
29	向尾根			○	○				○	○	○	○	○	昭和50・54年度発掘調査
30	南尾根			○					○	○	○	○	○	
31	中尾根								○	○	○	○	○	
32	大横道上			○	○				○	○	○	○	○	昭和42・51年度発掘調査
33	ワナバ			○					○	○	○	○	○	
34	粉の木			○	○				○	○	○	○	○	
35	臥竜			○	○				○	○	○	○	○	村史跡 昭和33・35・36・45・57・平成3・7・8年度発掘調査
36	小沢				○					○	○	○	○	昭和54・57・63・平成4・5・9・10年度発掘調査
53	雁頭沢			○					○	○	○	○	○	昭和57・58年度発掘調査
54	宮ノ下		○		○				○	○	○	○	○	昭和57・58年度発掘調査
55	中尾根		○	○	○				○	○	○	○	○	平成6年度発掘調査
56	家前尾根		○	○	○				○	○	○	○	○	平成6年度発掘調査
57	久保地尾根		○						○	○	○	○	○	昭和5・平成6・7・8年度発掘調査
62	庚申			○										
75	山の神上			○	○	○			○	○	○	○	○	昭和45・57・平成8年度発掘調査
99	中尾根頭			○					○	○	○	○	○	平成10年度発掘調査

調査対象地の土地利用状況は普通畠と水田であるが、普通畠はすでに削平された箇所があり、ロームを粉碎し耕作土としていた範囲は広い。沢寄りの水田は耕作土直下が地山の自然礫となる範囲が広いが、造成時における切り盛りが著しいため層序は安定していない。部分的に尾根に直交する沢状の落ち込みを確認したが、地山までは深く真黒色土の発達がみられた。この真黒色土を掘り込んだ住居址を当地方で確認したことではなく、本遺跡においても同様であり遺物の出土もなかった。

調査面積は、第4図の調査範囲・遺構分布図に示したように708.8m<sup>2</sup>である。



第3図 発掘区域図・地形図（1：2,500）



第4図 調査範囲・遺構分布図（1：600）

## V 遺構と遺物

調査の結果、縄文時代は中期の土器と石器を発見したが遺構を検出するまでは至らなかったが、遺物の出土数からみて尾根上には住居址の埋没が容易に考えられるものであった。平安時代は竪穴住居址 2軒を検出しているが、両住居址とも耕作による擾乱が著しいうえに、1号住居址はトレンチ調査で破壊した範囲もあるが、炭化種子の出土があり良好な結果を得ることができた。

### 1 縄文時代の遺物

縄文時代の遺物は、土器と石器があるが遺構に伴うものはない。出土状態および出土数からみて尾根上に住居址の埋没は容易に考えられるものである。

#### 土器（第5・6図）

土器は、破片ばかりであるが比較的多く、第5・6図の36点を図示した。全て中期中葉である。

#### 石器（第7・8図）

石器は、35点出土しているが、21点を図示した。器種別にみると、打製石斧は第7図1～5の5点で、1～3は硬砂岩、4は凝灰岩、5は片岩製であり、3には黒色の付着物がみられる。6は横刃形石器1点で凝灰岩製である。7は小形な磨石で、8・9、第8図10は凹石3点で側面には敲打痕が観察でき敲石としても使用され、8・9は磨石との併用も考えられるものである。10は転石を利用したものであるが、いずれも当地方で産出する安山岩製である。

図示した黒曜石製の小形石器類は11点で、11～15の5点がスクレイバー、16・17の2点が石核、18～21の4点が楔形石器である。

### 2 平安時代の遺構と遺物

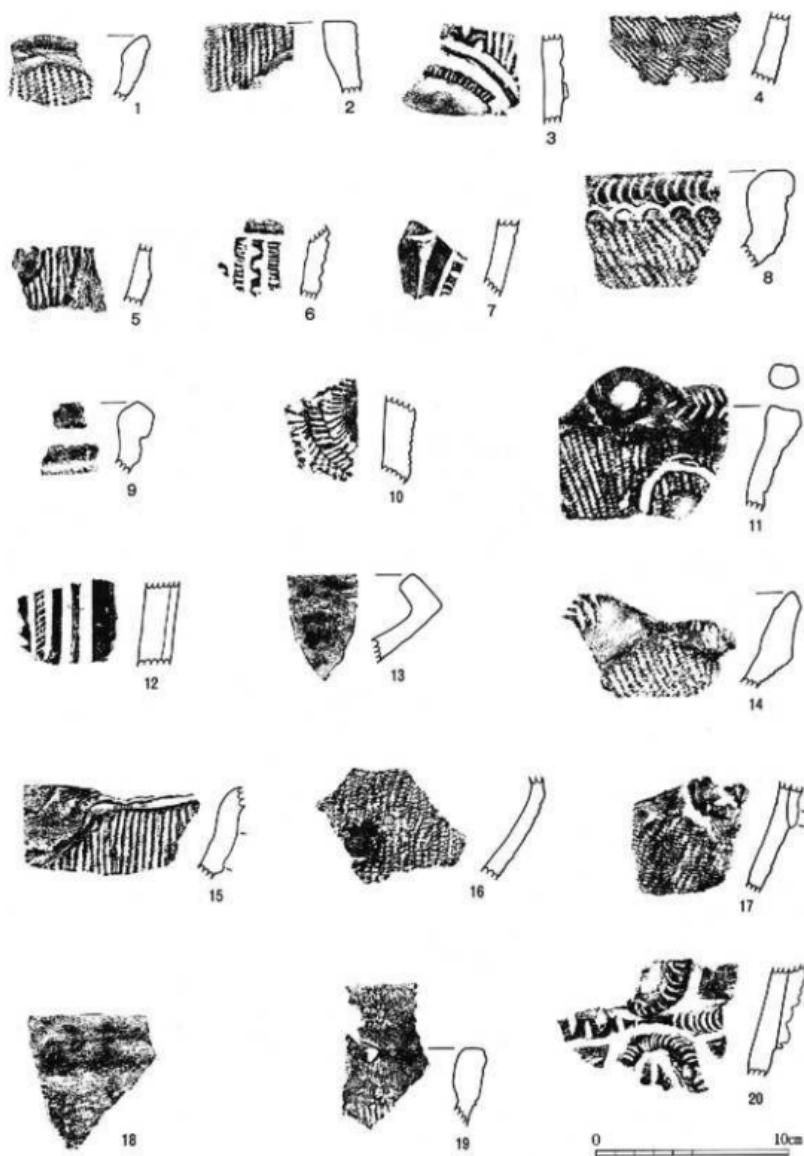
平安時代の竪穴住居址を2軒検出したが、耕作による擾乱がみられ良い遺存状態ではなかった。なお、本文中のカッコ付けの数値は流失した住居址の現存部分を示している。

#### 1号竪穴住居址（第9図～第11図）

南斜面に構築されていた隅丸方形を呈する竪穴住居址で、南側はすでに流失していた。

黒色土層中に構築された住居址であるうえに、耕作の畝による擾乱が著しく平面プランを検出するまでに時間がかかり、結果的には繰り返し埋土を削りとってしまったことになり不明瞭な点の方が多いが、いわゆる逆三角堆土と三角堆土の発達がみられるものであり自然埋没と思われる。なお、床面直上の広範囲にわたって焼土がみられ火災が考えられるものである。

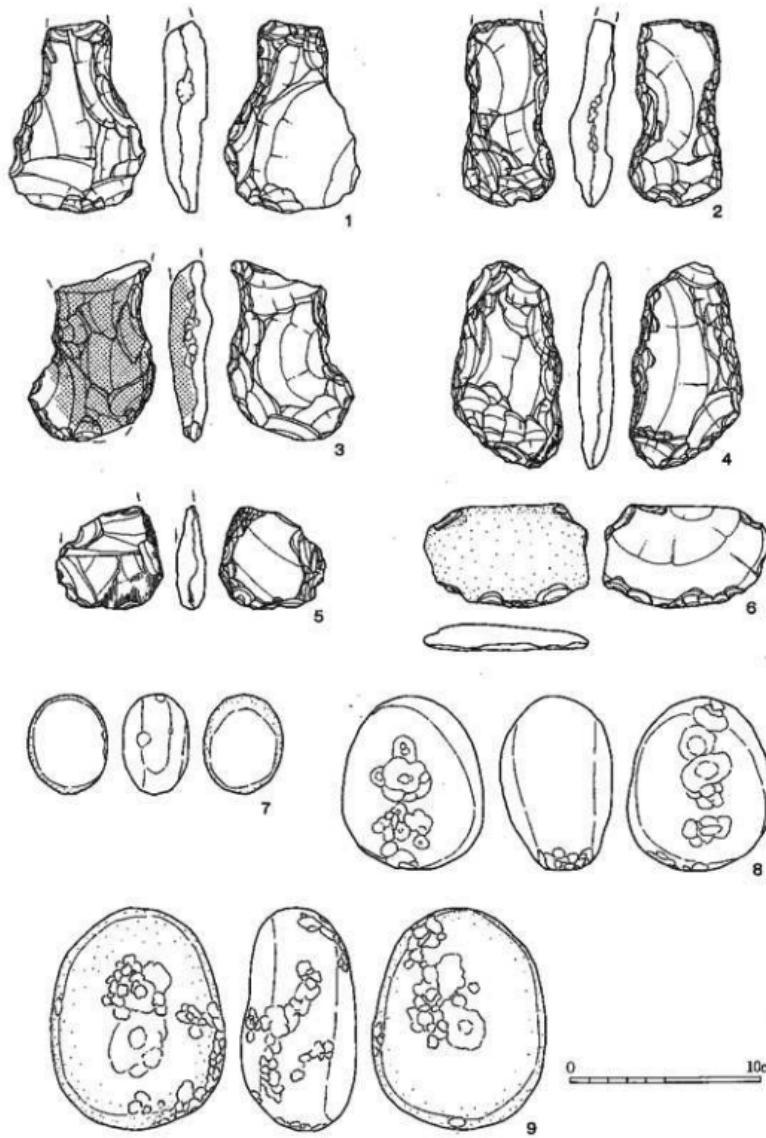
竪穴の大きさは東西620cm、南北(500)cmと大きい。壁の立上りは普通であるが、黒色土中に構築されていたこともあり、やや不明瞭な箇所もみられた。壁高は高い北壁で7cmを計るが、南壁はすでに流失していた。床面は緩やかに自然傾斜方向の南に傾斜しているが、部分的にタタキ床も認められるが軟弱な所が多く、総体的にはあまりよくない。北壁際のP1の性格は不明である。カマドの南に接するP2の上面には貼床が認められた。その位置関係から旧い灰だめの穴と



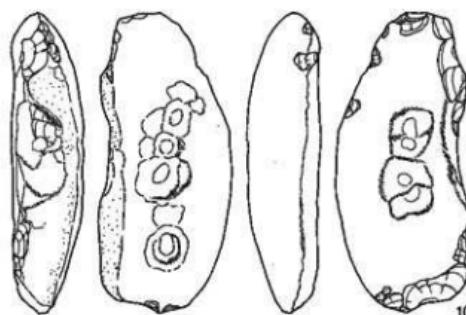
第5図 遺構外出土縄文土器拓影(1) (1 : 3)



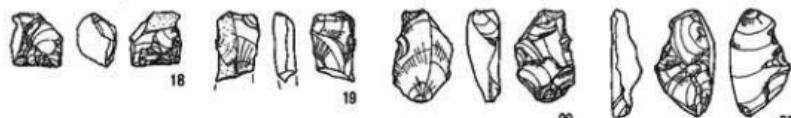
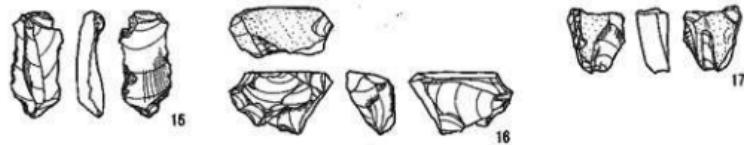
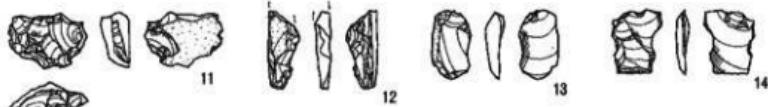
第6図 遺構外出土繩文土器拓影(2) (1 : 3)



第7図 造構外出土石器実測図(1) (1 : 3)



0 10cm



0 5cm

第8図 遺構外出土石器実測図(2) (10 1:3、11~21 1:2)

考えられる。

カマドは東壁に石組粘土カマドがある。石の多くは抜き取られ原形をとどめているものは少なかったが、火床の焼土は厚い。

遺物は比較的多く、炭化種子、土師器、灰釉陶器、鉄製品、石器がある。

炭化種子は、住居南西の床面直上から出土したもので、本址に伴うものである。径3cm程の塊となっていたが、肉眼で明瞭に種子が観察できるもので、パリノ・サーヴェイ株式会社に種子同定を依頼した。その同定結果は「VI 炭化種子の同定報告」で記載した。

土師器は、第10図1～7の壺7点、8～10の碗3点、23の甕1点があり、灰釉陶器は、11～15の皿5点、16～22の碗7点があり10世紀代である。

鉄製品は、第11図1の1点で断面形が長方形を呈していることから鉄鎌の中子と考えたが、やや長いように思われ紡錘車の軸の可能性も捨て切ることができないでいる。

石器は、第11図3の砥石1点は半欠品である。

## 第2号竪穴住居址（第11図～第13図）

1号住居址の西方の南斜面で検出したが、住居址の西側は工事の予定地から外れていたためその全てを調査できなかつたうえに、南側は黒色土層中に構築されておりすでに壁および床面は流失しているが、隅丸方形を呈する竪穴住居址と思われる。

耕作による歟の攪乱が著しく不明瞭な点が多くみられたが、北側はローム中に、南側は黒色土層中に構築された住居址で、南側はすでに流失している所もみられたが、埋土はいわゆる逆三角堆土と三角堆土の発達が認められたもので自然埋没と思われる。

住居址はP1・P6と重複していたが、P1がカマドを破壊していることから、住居址が旧くP1が新しい。北西隅で検出したP6も埋土のあり方からみて住居址よりも新しいもので、P1とP6の類似点は多いが性格は不明である。P1とP6は確実に住居廃絶後に掘られた穴であり、住居址とは別遺構であるが小竪穴番号は付けずにここではP1・P6の名称で報告しておきたい。

竪穴の大きさは東西(370)cm、南北(320)cmを計る。壁面にはたび重なる耕作による破壊がみられあまりよくないが、壁の立ち上がりは普通である。壁高は高い北壁で21cmを計るが、南壁は流失している。床面の残存範囲を破線で示したが、タタキ床も一部で認められはしたが総体的には良くない。柱穴はP2・P4・P9・P10の4本があり、P2とP4はいわゆる壁柱穴であることからみて、壁が流失している南側のP9とP10も同様であったことは容易に考えられる。P3も柱穴であるのかもしれない。P11の埋土中には焼土もみられたが、灰だめの穴と考えるにはやや小さいようにも思う。P5・P7・P8の上面には貼床が認められたが、P7から土師器の破片が出土している。周溝はP3とP4を結ぶわずかな範囲に見られるが、その深さ2cmと浅いものである。

カマドは東壁に石組粘土カマドが構築されていたものと思われるが、すでにP1によって破壊され、天井石と思われる角柱状の石1点とわずかな石が散在していた。火床も半分ほどは欠損していたが残存した焼土の厚さは4cm程を計り、その下層も火熱による変色が認められる。

遺物はそれほど多くないが、土師器、灰釉陶器、鉄製品がある。

土師器は、第13図1～3の壺3点、5・6の甕2点、灰釉陶器は、4の碗1点があり10世紀代である。

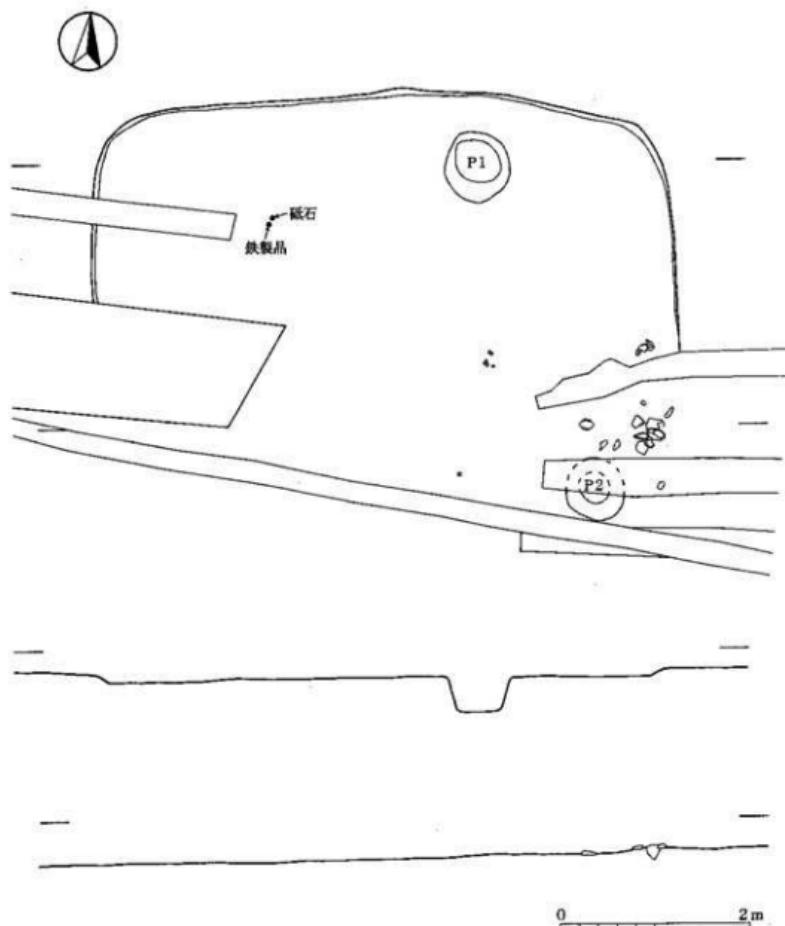
鉄製品は、第11図2の刀子1点、図示していないが鉄滓1がある。

P 1・P 6（小堅穴）

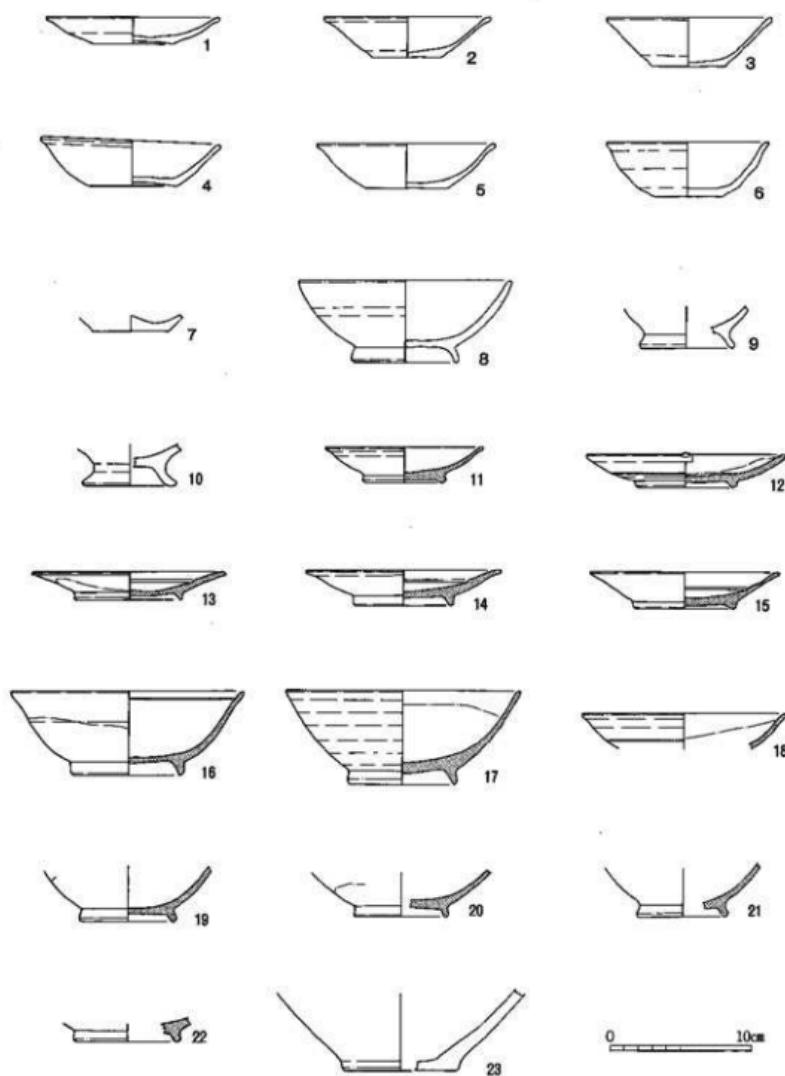
P 1は、2号住居址のカマドを破壊しローム層に掘りこまれた小堅穴で、平面形は103×95cmの不整楕円形を呈し、深さは2号住居址の床面から18cm前後を計る。

P 6は、住居北西隅の床面を破壊しローム層に掘りこまれた小堅穴で、平面形は(115)×100cmの不整楕円形を呈し、深さは2号住居址の床面から23cm前後を計り、P 1とP 2の形状、規模ともに極めて類似するものである。

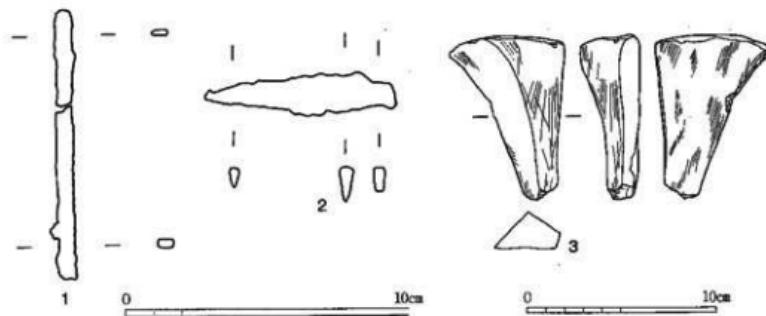
遺物の出土は、P 1はないが、P 6から縄文中期土器破片6点が出土したが、帰属時期や性格などを示すものではない。



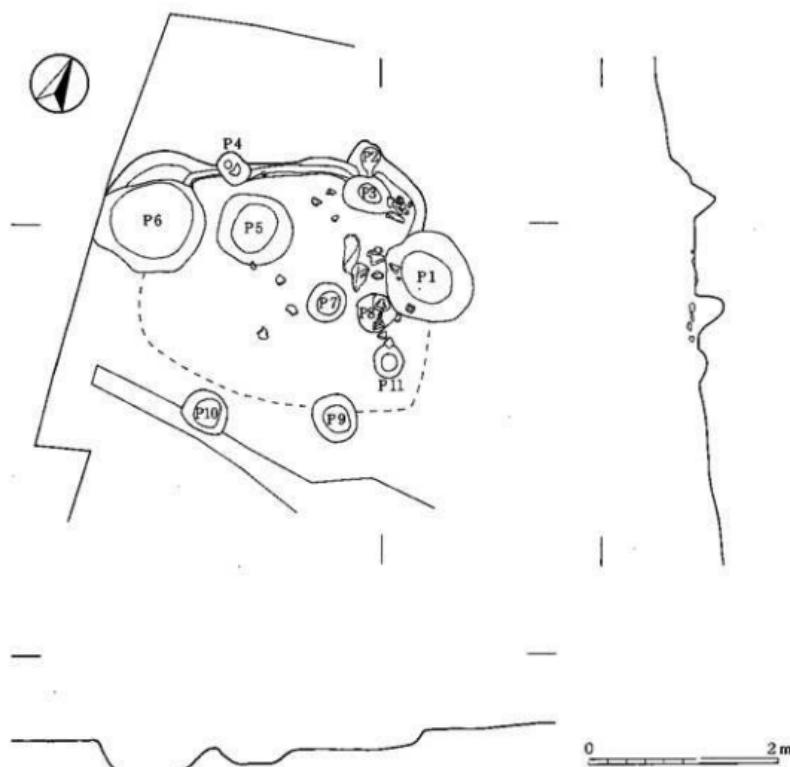
第9図 1号住居址実測図 (1 : 60)



第10図 第1号住居址出土土器実測図（1：4）



第11図 第1・2号住居址出土鉄製品・石器実測図 (1・2 1:2、3 1:3)

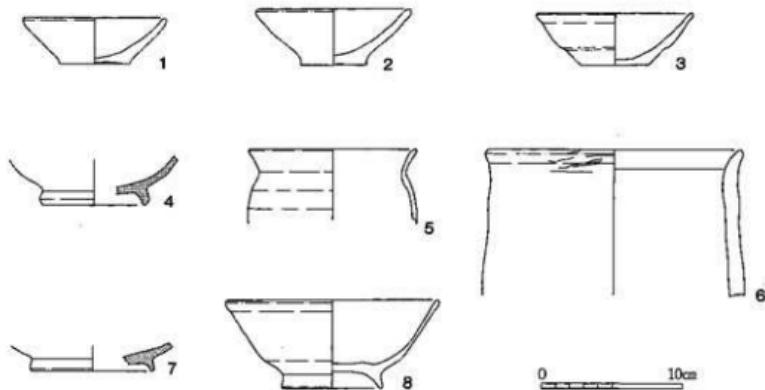


第12図 第2号住居址実測図 (1:60)

### 遺構外出土遺物（第13図）

遺構外からは土師器、灰釉陶器、鉄製品が出土している。土師器は、第13図8の碗1点、灰釉陶器は、7の碗1点であり10世紀代である。鉄製品は、残片ばかりで鐵鎌の中子状のもののみられるが帰属時期を明らかにできない。

なお、1号住居址の埋土中から寛永通寶1点が出土しているが、明らかに混入遺物であり図示していない。



第13図 第2号住居址遺構外出土土器実測図（1：4）（1～6 2号住居址、7～8 遺構外）

## VI 炭化種子の同定報告

### 中尾根頭遺跡出土種子の同定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

#### はじめに

中尾根頭遺跡で縄文時代中期の土器破片や石器を含む遺物散布地と、平安時代後期の竪穴住居址等が確認されている。このうち、平安時代後期の1号竪穴住居址では、焼土と共に炭化種子などの炭化物が検出された。

本報告では、1号竪穴住居址から検出された炭化物のうち、穀物類と考えられる種実について同定を行い、植物食糧に関する資料を得る。

#### 1. 試料

試料は、1号竪穴住居址から出土した種実1点（試料番号11）である。

#### 2. 方法

炭化種実は、表面に泥が付着し、表面構造の観察が困難な状態であった。そのため、表面に付着した土壤を除去し、観察しやすい状態にするため、次のような処理を行った。試料を水酸化ナ

トリウム水溶液に数分浸し、付着した表面の土壌を泥化させた。その後水洗し、乾燥剤中で乾燥させた。この間、炭化種実の破損を極力防ぐため、迅速に処理を進め、かつ水洗は弱く実施した。乾燥後の種実遺体を双眼実体顕微鏡で観察し、種実遺体を同定する。また、水洗中に剥がれ落ちた種実の一部に関して、電子顕微鏡による観察も行い、より詳細な種類の同定を試みた。

### 3. 結果

双眼実体顕微鏡ならびに電子顕微鏡にて観察を行った結果、いずれも「アワ」であることが確認された。アワは、炭化して大きさが数cmの塊状になっているが、一部はバラバラになっている。

アワ (*Setaria itarica Beauv.*) は、胚乳の状態で出土したものがほとんどであるが、一部穎が付着した状態のものもある。アワ・ヒエ・キビなど雑穀類の種実は、同定が難しく、これらの識別に関しては、穎表面の観察が必要になる。そこで、穎が付着している個体を一部抽出して、電子顕微鏡による観察を行った。その結果、長細胞の縦と横の比はほぼ等しい、細胞の側枝は波打っており先端部が膨らむなどの特徴を有する。これを既存の成果（松谷、1980：Watanabe, 1970）と比較して考えると、典型的な長細胞の先端に突起が見られるアワの形態とは異なるが、突起を有しないアワの品種の形態に近い。このことから、今回検出された個体はアワであると考えられる。

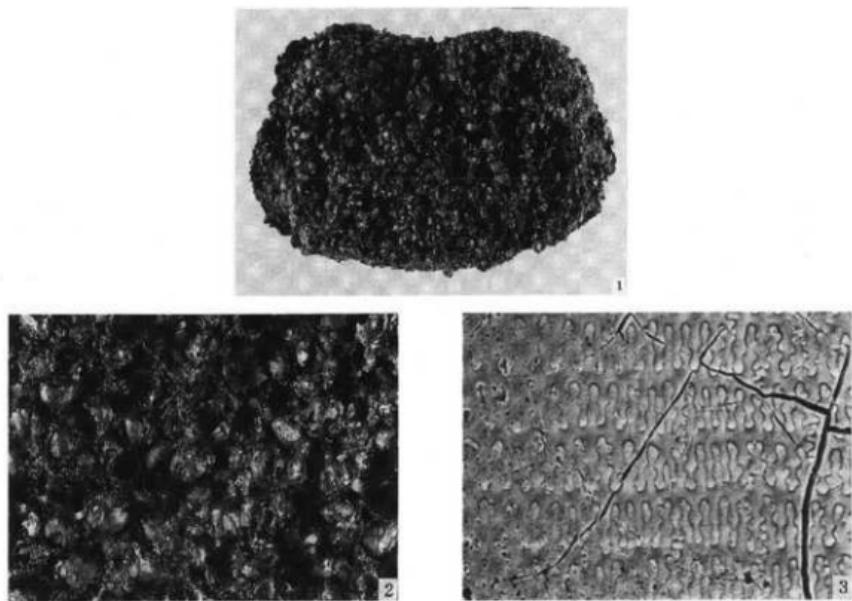
### 4. 考察

アワは、胚乳を食用とする栽培植物である。古い時代に大陸から渡来したと考えられるが、渡来時期の詳細については不明である。本地域では、大石遺跡や上野尾根遺跡等で、縄文時代中期・後期の住居址から炭化したアワの種子（胚乳）が出土しており（松本、1977；平出、1978）、古くから畑作作物として栽培されていたことが推定される。今回の結果から、平安時代にも引き続き周辺で栽培されていたことが推定される。

今回のアワは、食用とする部位が炭化していることから、火熱にあって焼失したと思われる。癒着しているため明確ではないが、穎が付着しているものが含まれることから、脱穀前の状態のものが火熱を受けたことが推定される。穎が付着していないものもあるが、火熱を受けた際に脱穀したと考えられる。これらのことから、住居内に貯蔵・保管されていたアワが火災などにより火熱を受けた可能性が考えられる。

### 引用文献

- 平出一治（1978）長野県上野尾根遺跡の調査——アワの炭化種子を中心に—. 考古学ジャーナル, 147, p. 9.  
松本 豪（1977）長野県諏訪郡原村大石遺跡で発見された炭化種子について. 季刊どるめん, 13, p. 81-84, JICC出版局.  
松谷曉子（1980）十勝太若月遺跡出土炭化物の識別について. 浦幌町郷土博物館報告, 16, p. 5-13.  
Watanabe Naotsune (1970) A Spodographic Analysis of Millet from Prehistoric Japan. Jour. Fac. Sci., Univ. of Tokyo, See. V, 3, p. 357-379.



## VII まとめ

### 縄文時代

調査地点が、南斜面の下方に位置していたこともあり遺構を検出するまでには至らなかったが、中期中葉の藤内期から井戸尻期の土器破片と石器が出土した。遺物の出土状態からみて尾根上には、住居址の埋没は容易に考えられるものであった。

該期における遺跡は、幅の広い尾根上に展開する大規模集落址というイメージが強く、本遺跡のような馬の背状のやせ尾根が注目されることは少ないが、中期中葉期の遺跡立地を考える上で貴重な発見であったと思っている。

### 平安時代

これまでに実施してきた県営扱い手育成基盤整備事業並びに県営圃場整備事業に先立つ緊急発掘調査において、平安時代の数多い集落址の調査をしてきたが、それらの遺跡に比べると本遺跡は小さいものである。また、このような小規模な日溜り地形に目に向かうことがなかったこともあり、やはり平安時代の遺跡立地を考える上において貴重な発見であったと思っている。

最後に、関係者各位ならびに調査にたずさわった方々に厚く御礼申し上げる次第である。

### 引用参考文献

1974 07 諏訪清陵高等学校地歴部考古班「原村の考古学的調査 上」(『土』8)

1985 07 原村役場『原村誌 上巻』

写真 1  
遺跡遠景



写真 2  
第 1 号整穴住居址



写真 3  
第 2 号整穴住居址



## 報告書抄録

ふりがな	なかおねがしらいせき
書名	中尾根頭遺跡
副書名	平成10年度 県営担い手育成基盤整備事業払沢地区に先立つ緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	原村の埋蔵文化財
シリーズ番号	51
編著者名	平出一治
編集機関	原村教育委員会
所在地	〒391-0192 長野県諏訪郡原村6549番地1 Tel 0266-79-7930
発行年月日	西暦 1999年03月

所収遺跡	所在地	コード		北緯度分	東経度分	調査期間	調査面積m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中尾根頭	長野県諏訪郡 原村払沢	3637	99	35度57分34秒	138度13分29秒	19980903 19981118	708.8	平成10年度 県営担い手育成基盤整備事業 払沢地区

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中尾根頭	集落跡	縄文時代 平安時代	後期 竪穴住居址	2軒 縄文時代 中期土器破片、石器 土師器・灰釉陶器・ 鉄製品・砥石・炭化 種子	八ヶ岳西麓地方における 平安時代後期の小集落 跡の調査で、集落研究の 好資料となろう。

原村の埋蔵文化財51

中尾根頭遺跡

平成10年度 県営担い手育成基盤整備事業  
乗合沢地区に先立つ緊急発掘調査報告書

発行日 平成11年3月

発行 原村教育委員会  
長野県諏訪郡原村

印刷 もえぎ企画書籍  
岡谷市御倉町2-21

